

ツノナシオキアミ資源開発調査

(抄 録)

高 坂 祐 樹

本県太平洋海域におけるツノナシオキアミの生態を把握し、新漁業としての企業性を把握するために調査を行った。その結果、1997年3月に泊地区の漁業者から提供されたオキアミ標本はすべてツノナシオキアミであり、その体長組成は18～20mmをモードとしたほぼ単峰型となることがわかった。また、太平洋2線（北緯40° 30′ 線と北緯41° 00′ 線）の海洋観測時に採集したプランクトン標本からツノナシオキアミの出現頻度を調べた。その結果、1996年10月では泊沿岸域のツノナシオキアミ出現頻度が他調査海域に比べ最も高く、1997年10月の同海域と比較しても10倍以上の分布量であった。1997年には1996年のような海が赤くなるなどのオキアミ浮上群と思われる魚群は目撃されていない。そのため、1997年の沿岸域でのツノナシオキアミ分布量は1996年に比べ少なかったと推察された。一方、泊沖の津軽暖流水と親潮系冷水の混合域でもツノナシオキアミが確認され、1997年の全調査海域中最もツノナシオキアミの出現頻度が高かった。1997年は1996年に比べ親潮第1分枝の南下が早かったため、それに伴いツノナシオキアミの南下も早かったと推測された。これらのことから泊地区前面海域では沿岸付近に分布する群と沖合の混合域に分布する群の2群が存在することが示唆された。